

小説家にはない優勝 どこまでも野球に囚われて



早見和真氏

小説家

1977年生まれ 神奈川県出身。

2008年『ひゃくはち』で作家デビュー。2015年『イノセント・デイズ』で日本推理作家協会賞（長編および連作短編集部門）を受賞。2020年『店長がバカすぎて』で本屋大賞ノミネート、同年『ザ・ロイヤルファミリー』で山本周五郎賞とJRA賞馬事文化賞を受賞。近著に『笑うマトリョーシカ』『八月の母』などがある。母親の視点で高校野球を描いた最新作『アルプス席の母』が、数多くのメディアに取り上げられ、早くも3刷となるなど大きな反響を呼んでいる。また、1995年の渋谷を描いた『95』が、テレビ東京開局60周年連続ドラマとして、高橋海人主演で放送中。

小学生の頃作文はいつも賞を貰えるほど
野球が上手な少年がある日目にした怪物のバットイングで
野球が終わった日を迎える
たかが中2の自分が「本物」を見抜けたことは褒めてあげたい
小説家の原体験は間違いなくその日

リレー
対談

文学賞はひとつの発明 野球は戻っていくふるさと

文章の力は凄いと思わせた唯一高校時代に読んだ本
偶然の「人生を賭けて書いてみる」の言葉に押され
高校時代の絶望的経験から野球を書くことに怖いものはない。
売れ筋のものを書いて媚びるよりやりたいことを
いつか海外移住して1冊でいい、スペイン語で小説を書きたい…と



高橋由伸氏

野球評論家・元読売巨人軍監督

1975年生まれ 千葉県千葉市出身。
神奈川県・桐蔭学園高校では1年夏、2年夏に甲子園出場。慶應大学に進学し、1年春から4年秋までのリーグ戦全試合フルインングでプレー。三冠王獲得、通算23本塁打の東京六大学新記録を樹立するなど、神宮球場で数々の記録を打ち立てる。1997年ドラフト1位で巨人軍に入団。新人年から開幕スタメンを勝ち取り、巨人では長嶋茂雄以来となる新人打率3割をマーク。以降は松井秀喜氏（元NYヤンキース）らと共に球界を代表する選手としてチームを牽引。2004年にはアテネ五輪にも出場し、オリンピックとして銅メダル獲得にも貢献した。2015年現役引退と同時に、読売巨人軍第18代監督に就任。3シーズンの指揮を執り、2019年から野球評論家として新たな道を歩み始めている。

高橋由伸と出会った
中2が小説家の原点に

高橋 今日は、小説家の早見和真君にリレーを繋ぎます。桐蔭学園高校野球部の2年後輩で、彼は附属中学校から高校に上がってきました。その頃から僕のことを知っていたのかな？

早見 もちろんです。

高橋 それから30年以上になります。あの頃は後輩のひとりという感じでした。

早見 今、柔らかく言ってくれましたが、恐らく当時は認識さえされてなかったと思います（笑）

高橋 そんなことないよ！（笑）

早見 4月に入学して、由伸さん達は夏に甲子園に行かれてないので7月迄です。3か月ぐらいですかね。由伸さんはその頃ケガをされていたので、僕ら1年生の練習の手伝いをよくしてくれていて、3年生の中では比較のお話しさせてもらった記憶があります。僕は小学生の頃は野球が上手で、小学校6年生で比べたら、高橋由伸にそんなに負けてない、というレベルの筈でした。推薦で桐蔭学園の中学校に入学



早見和真氏

う意味では、間違いない。あくあの日はある。本当中2からはある種「余生」だと思っっていました。でも推薦で入った以上、高校も野球部に入らなくてはならなくて……。人生で一番とていうくらい憂鬱だったのですが、高校に入ったからそこからは僕のデビュー作、『ひやくはち』の世界でした。「ムードメイカーの補欠」という自分の居場所を見つけられましたし、この3年間で、すっぱりと野球を諦めることができました。由伸さんがいなかったら、多分スルズルと自己肯定感が高いまま野球を続けた筈です。いろいろな感情がありますね。中2の目で高橋由伸を見抜けた自分を褒めてあげたい部分と、「たかが高橋由伸を見ただけでやる気を失ってしまった自分」に対するジレンマを今でも引きずっているというか。

高橋 本当に？（笑）

早見 当時は言葉にできなかったけれど、本当にそうですよ。同級生と一

して、それは多分歴史上あまりないこととで、中1の時はその貯金で野球をやっていました。中学と高校のグラウンドは隣同士で、中2に上がる時に「怪物・高橋由伸」が高校に入学してくると。当時の傲慢な僕は「こんなもんだ」と思っただけに見物にきました。その時の由伸さんのバッティングを今も鮮烈に覚えています。それ程ショックを受けました。「この人がプロ野球選手になるなら、自分はプロ野球選手になれない」と突きつけられた気がしましたね。

高橋 高校生の時にはまだ「小説家」という発想はなかったでしょう？

早見 ただ「野球が終わった日」とい

緒に由伸さんの最初の練習を見に行つて、何人かが「わー、凄いなあ」と大騒ぎしている中でひとりだけネットに顎をつけて寂しそうな顔をしていたそうです。由伸さんは様々な場所で、多くの人にそういう思いをさせてきた筈です。きつと気付いていないでしょうけど。

高橋 気付いてないなあ。（笑）特にその頃は千葉の田舎から出てきたばかりで、周りに負けちゃいけないと毎日必死だったからね。ところで、久しぶりに会ったのって僕が監督になる時期だったかな。

早見 高校以来の再会はその時でした。

高橋 そうだったね。それにしても『ひやくはち』は本当に面白いというか、懐かしいというか。一瞬で見終わつたよ。あの映画の中に、高橋由伸がいたのかな？

早見 はい、きつといらつしゃいます。でも『ひやくはち』の中では由伸さんは脇役の1人の筈です。社会の目とチーム内の視線で言えば由伸さんこそが当然主役で、僕らは十把ひとからげの脇役ですが、『ひやくはち』ではそういう脇役こそを主人公にした

と思いました。『ひやくはち』以降の小説も、いわゆる王道の主人公っぽい人はあまりいません。

高橋 そんな高校時代が今の創作活動に生きてというか、土台になっているの？

早見 間違いなく高校時代が今の自分の出発点です。「小説」の世界もプロ野球と同じく、当然天才ばかりで、それこそ野球に置き換えたら高橋由伸ばかりですけど、あの時の経験をしているからそれ程怖くなくて。この世界でどう振る舞えば自分が戦えるかというのは身につけているつもりです(笑)。もちろん由伸さんにはそんな経験はないですよ？

高橋 いやー、入った時の巨人は4番バッター揃いだっただしね。「自分の居場所をつくらないといけないな。どうやったら試合に出られるかな」とか深く考えて今があるよ。

早見 以前「松井秀喜という人物が自分の考えを変えた」とおっしゃっていたのを覚えています。松井さん以外にも飲まれるような圧倒的な方っていましたか？

高橋 他のチームだと2歳上のイチローさんとかね。早見が感じたように、

「たった1、2歳上だけなのにこんなに違うのか」みたいなのはあったかな。

留年と就職活動の挫折 人生を賭けて小説の道へ

高橋 ところで子どもの頃から書くことが好きだったの？

早見 小学生の頃の作文はすぐに賞をもらえるような感じでした。でも、それは文章力がどうこうというより、ただ目線がひねくれていて素直ではなかったからだと思っています。「こんなのを書けばどうせ大人は喜ぶだろう」と。下手なのですが絵でも賞をよくもらっていて、それは「多分、皆がこんな絵を描いて出すだろう」とい

うのを逆手に取って、僕の思う「子どもらしく、斬新なもの」を描きさえすれば賞は獲れました。当時から小賢しかったのです(笑)。

高橋 凄いな。それで「プロの小説家になりたい」と思っただけですか？

早見 「プロの小説家」という視点はなかなか持てませんでした。「文章を書きたい」と思っただけの高2の時です。当時学校には沢山の新聞記者が来ていたのですが、あの人はエースや4番、キャプテンにばかり話を聞きたがる。でも、彼らは野球は上手だし、でも弁が立つわけではない。「皆のこゝとを聞きたいなら僕の所に来ればいいのに」と本気で思っていました。でも、彼らにそういう視点はなく、それなら

たと思いますが、1冊の本を貰ったことも大きかったです。それが高校の3年間で読んだ唯一の本で、6時20分の起床時間迄寝ずに読んだことを覚えています。朝、目に見える世界の色が変わっていて、文章って凄いななどと思わされましたね。

高橋 どんな本だったの？

早見 沢木耕太郎さんの『テロルの決算』というノンフィクションでした。由伸さんは僕の新聞をよく読んで下さって感想をくれますよね。これ、完全に偏見ですけど、野球選手って本とかあまり読まないじゃないですか？しかも監督まで務められた由伸さんが……。

高橋 読むよー、早見の新聞出たらちゃんと読んでます！(笑)

早見 本当にありがたいなと思ってします。しかも感想を早くくれますし。特別鋭い感想ということはいいですけど(笑)

高橋 ひと言多いな！(笑)ところで高校卒業してからはどんな人生だったのかな？

早見 僕は高校に入る時には「野球はここまで。大学ではやらない」と決めていたのですが、他の皆はもちろんい



高橋由伸氏

高橋 へえ。他には何かあった？

早見 寮に遊びに来たある先輩からだっ

い大学に野球推薦で行くわけです。なので、自分は彼らがやれないことをしようとして決めていました。そのひとつが読書、もうひとつが世界中を旅することです。その決意は頑なに守ることができて、最終的に頭に入らなくても1日に3冊読むようになっていましたし、40か国ぐらい旅をしました。

高橋 それは大学在学中だけですか？

早見 はい。そんなことばかりしていたので人生経験ばかりが膨らんで、だから就職活動は得意でした。書類を通してくれる会社は軒並み内定をもらい、その中から朝日新聞社に行くこと決めました。高2の時に夢見た「文章でご飯を食べていく」足掛かりができて「これでもう人生安泰」と思っていたら、3回目ですかね、また留年してしまつて。就職そのものがバーになつて、もう大学に戻るお金もないし、3か月程アパートに引き籠つていました。そんな時、当時はただの知り合い程度だったのですが、最終的に僕をデビューさせてくれる集英社の編集者が「ちょっと飲みに行こうか」と誘つてくれて。そこで初めて「なぜ自分文章を書きたいと思うのか」「高校時代の絶望的な経験から野球を書くとい

うことに結びついた」といった話をしたら、「出版の約束はできないけれど、人生を賭けてそれを小説にしてみたら？」と言つてくれて。僕の人生でそれは最後のチャンスだと思ひましたし、その日のうちに大学に退学届けを出して、その言葉に縋つて書いたのが『ひやくはち』です。

高橋 もし、大学を卒業して就職していたら現在の早見はいないということか……。

早見 由伸さんは野球をやらなかつた未来を考えたことありますか？

高橋 先輩達が就職活動をしているのを見て「皆と同じ普通の会社員になつた方がいいのかな」と思つたことはあつたかな。ただ、3年生になる頃に2年上の高木大成さんがプロに行つたことで「同じ舞台で戦えるかもしれない」と思ひだし、漠然とだけけど「今しかできない野球」をまずはやってみようという感じかな。自分の性格で、未来を見据えて打算的にやつたら行き詰つていたかもしれない。

早見 そういうタイプですよ。由伸さんはいい意味でその環境に流されていられるというか。天才ゆえの特権だと思ひます。

高橋 運よく自分がいい環境の所に行けたからね。早見は、野球をやりたくない状況でも、桐蔭の高校に進学した。

早見 推薦で中学に入ったので、高校で野球をやらなくて多くの人に迷惑がかかるのが分つていたので。高1から寮に入る時の僕の「嫌だな」という思い以上に、おふくろが泣いていたのを覚えてます。娘が4月から中3になります。親の立場からすれば娘とあと1年しか付き合えないということですよ。あの時のおふくろの気持ち、今ならちよつとだけ分かります。

高橋 確かに。うちも娘が2人いて、まだ自宅から離れることもないから実感としてないけれど、言われてみるとそうだよ。

早見 自分は親への感謝をしきりに口にする人が苦手です。寮に入つたぐらいで急にありがたみを語りやがって、どうせ寮を出たらまたお金をせびるくせにとか思つて（笑）。ひねくれ者だから。

高橋 僕は有難かつたなあ（笑）。きつと高校を出ても、家からは通えない大学に行くだろう、そうしたら就職だろうし、「千葉の実家に戻る」という選択肢はないだろうなと思つていたか

ら。

早見 確かに。由伸さんはあれから実家で暮らすことはなかつたですよ。それを高校時代から自覚していたのだとすれば、僕は全然違いますね。

伊豆と松山で

新たな道を拓いた

高橋 話は戻るけど「小説家になれる」と思つた瞬間は？

早見 うーん、どうですかね。2003年から『ひやくはち』を書き始めて、実際には08年にデビューしてもらいました。普通、新人賞を獲らないとデビューはできないのですが、映画化の話が先に進んだり、いろいろな人の協力があつて、何とかデビューにはこぎつけられて。でも、あれから15年以上が過ぎたのですが、正直、未だに小説家としての実感みたいなものはありません。謙遜でも何でもなく、ただ運がいいだけでここまで来られたというか。本当に未だに自分の立ち位置がよく分からないですね。

高橋 信じられないよ。今じゃ、こんなに凄い先生なのに。（笑）

早見 いやいや、とんでもないですよ。

『ひやくはち』が出た日、新宿の紀伊

國屋書店にサイン本を書きに行つたのですが、店内には山のように本があつて。当然、そこに自分の本も置かれて

いました。その時「どうして俺は自分の本を買つてくれると思つているのだろ」と……。書いていた時は「俺が

一番面白いものを書いてる」という変な自信がみなぎつていたのに、本屋に自分の本が並んだ瞬間に怖くなつてし

まつて、あの日から本屋が少し苦手な場所になりました。未だに自分の実力の無さは自分が一番知つているし、言葉が跳ねている小説家の小説を読む

と「ああ……。もう、敵わないな」と思われまます。それでも、やはり中学時代の、高橋由伸体験、よりは強烈ではないのです。どんな作品に触れても

「まあ、それはそれ」と切り離せるのは由伸さんのお陰です。

高橋 ある意味、光栄だね。(笑)でも、野球経験が作家生活とか仕事に活かされてる点はある？

早見 野球経験が活かされてるといふのはないですが、結局節目節目で野球の物語を書いている気はします。コ罗纳という社会的未曾有の出来事が起き

た時も、やはり野球を切り口に対話し

ようとなりました。

高橋 『あの夏の正解』は甲子園を奪われた球児を追つたノンフィクションだったよね。

早見 はい。愛媛県の済美高校と、石川県の星稜高校を取材させてもらいました。『ひやくはち』でデビューして

すぐ伊豆に移住し、愛媛の松山にまた移り住んだ頃に新型コロナウイルスが蔓延して、『あの夏の正解』をもつて

対峙しました。そして一昨年の春、13年ぶりに東京に戻つてきて、何となく新たなデビューというか、2周目の始

まりという気持ちがあつたので、やはり野球からリスタートするしかありませんでした。

高橋 最新作の『アルプス席の母』は、又違う視点だね。

早見 はい。母親視点の高校野球の物語です。今の僕には『ひやくはち』を書けない筈だし、あの頃の僕には『アルプス席の母』は絶対に書けなかつた。

小説家としての15年間のある種の集大成だと思つています。

高橋 元々神奈川だけど、伊豆や松山にも住んでたよね。
早見 転々としてますね。デビュー当時既に結婚して、娘が生まれる迄

東京の神楽坂にいました。プロ野球選手

手になれなかつたのに、プロ野球選手に匹敵する憧れの職業に因らずも就けてしまつた。人生をかけた目標が途切

れて、もうひとつ人生をかけた目標に到達できる人つてそんなにはいないだろうという自覚があつて、絶対にこれ

を手放してはいけなないとデビュー当時はかなりピリピリしていました。結婚

当時の僕はアルバイトだけで月収8万円といった状況でしたが、妻はいい会社に勤めていて、「結婚でもするか」と言つてくれて、「死ぬ気で僕のこと

を食わせてくれると約束してくれるなら結婚する」という約束で……。 (笑)。

高橋 昔の小説家みたい。(笑)
早見 そうですね、ほとんど「ヒモ宣言」です。本当に暴言だつたという自覚はあるのですが、産休を取つて

いる妻に、ピリピリが最高潮に達した時「貴女がサラリーマンだから移住も

できない」と言つたことがありました。1日も早く東京を離れて小説だけに打ち込める環境が欲しいのに、貴女のせ

いでそれができないと、逆恨み的に言つたら知らない間に会社を辞めてこられてしまつて。「はい。好きな所に住みましょう」と。

高橋 それは笑えない話だ。(笑)

早見 でも、辞めてこられた以上は引越すしかなくて、まずは東京に近い伊豆で小説家っぽい生活を6年間させてもらいました。家に引き籠つてひ

たすら書き続けるといふ日々を送らせてもらい、現時点では一番売れている『イノセント・デイズ』という

作品をひとまずものにできました。その毎日には本当に尊いものではあつたのですが、でも一方で「こんな三流作家が

一流みたいな生活をしているからこの程度のものしか書けないのだ」という

自分に対するムカつきもどこかにあつて。ちょうど娘の幼稚園卒園のタイミングで妻子に頭を下げ、「もう一度だけ、30代という若い時期に知らない街

に住まわせてくれないか」とお願いして。結果、今度は知り合いがひとりもない松山で暮らすことになつたので

す。

高橋 その松山時代にも会つてるよね。

早見 そうでした。由伸さんが松山に野球教室で来られた時でした。松山を選んだ理由を強いて言うなら、野球と文学の街といふことはひとつあつたかもしれませぬ。正岡子規を輩出した

所ですし。結局、ここにも6年住みま
した。

高橋 その6年間で愛媛が舞台になっ
た作品『八月の母』を書いたわけか。

早見 そうですね。愛媛での6年間の
集大成という気持ちはありました。最
初に『かなしきデブ猫ちゃん』という
愛媛を舞台にした絵本も書いていて、
そちらに表というか、愛媛のいいところ
を全部盛り込んでいて、裏の愛媛を
『八月の母』に託したという感じです。

高橋 作品のイメージというのはどう
やって降りてくるの？

早見 こんな話を由伸さんに聞いても
らうの、何かゾクゾクしますね(笑)

高橋 そう？(笑)

早見 「縛られたくない」とか「自由
でいたい」という想いが、最近僕は他
の人より強いのではないかと思いついて、小説のジャンルでさえ縛られ
たくないと思っています。いろいろな
ジャンルを書くことで幅は広がってい
くのですが、自分の本線がどこにある
のか実は自分でもよく分かっていませ
ん。書きたいものは前頭葉の辺りに常
にあるのですが、最近はいアイデアが
いつか枯れてしまうようなイメージも
ちよつとあって、焦っています。

高橋 その題材になるものは空想の世
界なのか、もしくは自分の経験から？

早見 ものによりますかね。実際の、
でも小説の内容とは全く違うニュース
を見ていたら『イノセント・デイズ』
のアイデアが湧きましたし、『イノ
セントを書け』という角川春樹さんか
らの依頼を受けたら『店長がバカすぎ
て』のアイデアが降りてきました。

例えば由伸さんと話していて、ふと由
伸さんの孤独とか寂しそうな感じに触
れたら「天才が抱える孤独」みたいな
ものがテーマになりえるとか、どこに
何が転がっているか分かりません。

高橋 元々空想家だった？

早見 わりとロマンチストではあった
気がします。

高橋 僕はあまり「書く」という発想
はないけど、あれだけの分量だと書い
ている間に構成的なものが膨らんでい
くものなのか、それともある程度最初
から全体像があるものなのか。

早見 僕の憧れる小説家の中には「書
き始めたらキャラクターが勝手に動き
出す」みたいなことをおっしゃる方が
多く、僕も自己暗示的にそう言ってい
たことがあります、あれは嘘でした
(笑) 僕の場合は、常に明確なゴール

だけ想定していて、そこを指して山
を登っていくという感覚に近い気がし
ます。たとえ毎月プロットで縛ったと
しても、僕の性格的に「プロットより

も絶対に面白いものを書く」という気
持ちは湧いてくるので、それも悪くな
いと最近では思っています。由伸さんは、
『ひやくはち』の情報はどこから入っ
てきたのか覚えてますか？

高橋 知り合いの記者だったかな、「こ
れ、桐蔭の後輩らしいよ」とDVDを
貰ったのが最初だった。折角だからと
映像見て、最初に気になったのは、こ
の作品の宣伝に同じ巨人の桑田さんが
出ていたこと。「何故、俺じゃないん
だ！」と。(笑)

早見 僕だって本当は由伸さんにお願
いしたいという気持ちはありました。

でも、あの頃は桐蔭出身の人たちは喜
んでくれないだろうという気持ちがあ
ったのです。「なんでお前だけ野球
部の想い出で金儲けしてんの？」とい
う刃を向けてくるだろうと本当にビ
ビッていて……。

高橋 僕は「ああ、バス停の上に神社
があったなあ」とか、皆で抜け出して
駐車場とか総合病院とかに行ったり、
雨の中を電話しに行つてとか……寮

の話も懐かしかったし本当に面白かつ
たよ。

早見 だとしたら、とても嬉しいです。
ありがとうございます。最近になって、
僕にとつて野球は何かあれば帰ること
のできるふるさとみたいな感じがあつ
て、そのふるさとの真ん中におい
人が由伸さんだという感覚です。でも、
その方は「落ち着いたら飯でも行こう
な」と言うだけで、まだ1度も誘つて
くれない(笑)

高橋 忙しいと言つてたでしょ(笑)

早見 (笑)。由伸さんは後輩に「行く
ぞ」と誘うタイプじゃないと思うので、
今度は僕の方から「この日空いてます」
と言いますね。まあ、それはそれでやっ
ぱり緊張しますけど。

賞を獲得しても すぐに過去になる

高橋 今日は忘れずにクラブを持って
きたよ！

早見 わあ、こつちの約束を覚えてく
れてた！ 以前「大きな賞を受賞した
らグローブをプレゼントする」とおっ
しゃつてくれて。

高橋 日本推理作家協会賞や山本周五

郎賞とかいろいろ受賞しているよね。

早見 由伸さんが監督に就任する直前かな、僕が日本推理作家協会賞ももらった直後に雑誌『SPA!』が、高校以来の再会となる対談を実現してく

れて、その時にグロープの話になったのですよね。でも、今だから話せるのですが、あの日は本当に緊張していてほとんど何も覚えていません。後でテープ起こしされた対談の生原稿を冷静に読んでみたら「高橋由伸ほどの選手がこの程度の成績で引退して悔しい」とか「イチローさんより当然上の成績を残すと思っていた」とか、失礼なことばかり言っていて。「高橋（苦笑）」とか書いてあって。そりゃそうだよな……と大反省しました（笑）

高橋 そんなことあったな……（笑）

早見 大混乱に陥ったあの日のことを思うと、今日は本当に穏やかに話させてもらっています。

高橋 お互いに成長したね。（笑）でも、小説家にとって賞をもらうのはやはり名誉なことだよな？

早見 小説家はひとりの作業なので、「文学賞は発明だ」とよく言われます。小説には「優勝」があるわけでもないですし、編集者や家族、読者も含めて

皆で喜べる瞬間というのが他にないので。大好きな作品が多い山本周五郎賞を獲れたその日の夜だけは達成感がありました。

高橋 えっ、その日の夜だけなの？

早見 翌日の朝「意外と満たされてないなあ」と思ったのを覚えています。欲張りなのか貪欲なのか分かりませんが。逆にプロ野球選手にとつての賞とはどういうものですか？

高橋 野球選手にとつてもその時は「やったー」という達成感はある。でももう次に向かってスタートしてるから、一瞬で過去になってしまふよね、確かに。

早見 ベストナインとかゴールドングラブ賞とか含めて、印象に残っているものはありますか？

高橋 正直なところ、獲ったら獲ったで、更に良く見えないといけない、もつといいものを見せないと、もつと上手くならないといけない、みたいなね。そうだよな、もつといいものを書かないといけないと思うよね。

早見 正に山本周五郎賞がそうでした。獲った次の日から「これ、今後の自分の作品次第で賞そのものを汚す可能性あるな」という気持ちが少しだけ

芽生えました。由伸さんは賞より優勝の方が満たされましたか？

高橋 正直、優勝してもそこに自分が貢献できていたかどうか。嬉しくないわけではないけど、1軍と2軍を行ったり来たりしている選手が、チームが日本一になって素直にそれを喜んでいたら駄目だろうし。プロ野球はチーム内の限られた席を選手全員で奪い合っているわけだからね。

早見 由伸さんは、現役が18年で、優勝は何回でしたっけ？

高橋 リーグ優勝は8回。ただ、2009年は怪我で全くいなかったの

で達成感とかはあまりね。そこに自分がいなかったわけだし。いない時にチームは日本一になってるから、翌年戻る時には「自分の居場所はあるのかな」と不安にもなる。そして晩年は代打というポジション。明らかに今までとは違う「たまに試合に出る補欠」だよな。これは野球をやつて初めての経験だから……。言葉には表さないけど、今までになんかを感じてたと思う。

早見 補欠球児を主人公にした『ひゃくはち』を出版する時に「必ず売れる」と思っていました。それは、仮に野球というひとつの縦軸で見た時に、全員

に補欠の瞬間が必ず訪れると思つたらです。余程のことがない限り、そこそそイチローさんでさえ最後は出たり出なかったりだったわけ。だからある意味、代打専門になった時の由伸さんは、僕の憧れた由伸さんの姿ではなかったけれど「すごくいいな」と思つて見ていました。今の由伸さんなら「ひゃくはち」は刺さるかもしれない（笑）。ところで、あの頃の後輩から小説家という職業の人間が出て、何とかこの世界にしがみついているのはどんな風に見えていますか？

高橋 しがみつくのは本人の生き方だから悪いことじゃないし、早見はしがみついてちゃんと成功してる。自慢の仲間だよな。自分はプロ野球という狭い世界で生きてきた人間だけど、一緒に歩んできた桐蔭や慶應の仲間が全然違ふ分野で活躍しているというのが、ビジネスの世界もそうだけど、まさか小説界にもいるのは普通はない。自慢でしかないよ。

早見 本当ですか。あまり満たされる瞬間というはないですが、今は何だか満たされそうです（笑）。松山に由伸さんが野球教室で来られた時、僕は当時まだ小3の娘を連れて遊びに行つ

て、いつもは一応父親をしているのに、由伸さんの前ではあの頃のようにしつかり後輩で。教室が終わって控え室に戻る際、由伸さんが遠くから「早見ー！」と手招きされて、その時、僕は本当に無意識に「はいっ！」と返事をして走って向かったのを見ていた娘が「パパ、超後輩！」と（大笑）。彼女にとって父親がダッシュする姿さえ初めて見たのではないかと思います。

高橋 先輩、後輩の関係性は一生変わらないからね。仕方ないよな（笑）

ガンジスのほとりでの物乞いをする「覚悟」

高橋 小説の題材を日々、探しているのか、それとも日常的なものの中でキラッと光るものをキヤッチするような感覚なの？

早見 僕は探して強引に掴みにいったものの方がつまらないと思っっています。アンテナを張って生きて、そこに引つかったものの方が面白いですね。

高橋 よく「産みの苦しみ」とか言うけど、小説家として大変なことって何？

早見 産みの苦しみもそうですが、他の職業と劇的に違う点があるとすれば、僕の場合は家の中こそが現場なので、常にオンの状態であるのがしんどいです。2008年6月26日のデビューの日から、これは本当に有難いことに、ただの1日も締め切りのなかった日はありません。デビューしてからの15年で、まともに熟睡した日は多分1日もないと思います。由伸さんなら常にグラウンドにいて、その上で野球の練習も試合も寝起きも食事も家族との営みも全てしろと言われてるような感覚だと思います。役者とか映画監督の友人を羨ましく思うのは、「撮影期間」という区切りがあることです。

デビュー以降のスパイラルは苦しいですが、そこから解き放たれてしまった時の方がしんどいのも理解はしている

ので、身体がもつ限りは身を委ねたいと思っっています。現在の由伸さんに日常のルーティンってありますか？

高橋 ルーティンというか、朝から少し走ったり、1度汗を出さないとオンになりづらいくらいかなあ。我々もいい年齢だけど、健康には気を遣っている？

早見 あまりしてないですね。書いてる時はタバコも1日5箱くらい吸いまくる。でもお酒は飲まなくなりました。小説を書く行為とお酒には親和性はない気がします。昔の文豪は知りませんが、「今、書きたい」と思った瞬間に脳味噌が濁っていたら得はないなど。常に現場にいてしまっていることの弊害かもしれません。

高橋 早見にとつてのタバコは、思考を研ぎ澄ますツールのひとつ？

早見 1行書くのに1本吸って、閃いたら消す、みたいなことを繰り返しています。いつだったか、朝起きたら机のへりに、ほぼ新品のシケモクが40本くらい並べられていたことがありました。あれは妻の無言の抗議だったのではないかと思っっています。もつたいいことをするなと（笑）ところで由伸さんは体型を気にされたりしてますか？

高橋 してるけど理想にはほど遠くて……。今は勝った負けたのストレスを抱えてないから食事美味しく感じています。

早見 表情も柔らかいですよね（笑）これから監督になるというあの時期はやっぱりギラギラしていました。

高橋 まだオン状態の頃だからね。それはそうと、今の早見の状況や今度の新刊についても聞かせてよ。

早見 12年ぶりに東京に戻ってきて、『ひやくはち』を書いていた時と同じ街に住んでいます。家賃は跳ね上がっているのですが、メンタルはあの頃と何も変わってなくて、未だに文壇の1番地べたにいる感覚です。だからデビューだという思いが自分の中にあつて、もう1度高校野球を書いてみたいと初めて思いました。でも、選手目線での物語では『ひやくはち』に勝てる筈がない。では、この15年で僕が獲得したものは技術以外に何だろう……と考えた結果、親という視点と高校野球に対する眼差しの違いだと捉えたので、そこから最新作『アルプス席の母』のアイデアは生まれました。実際に様々なルートを使って、名だたる名門校のお母さん達に話を聞いたのですが、「やっとこの日がきた」「やっと誰かに聞いてもらえる」と、出てくる不

平不満がゾクゾクする程面白くて。「これは成功するな」と確信できました。
高橋 実際、今、野球界はどうしても親や保護者の負担が大きくなっている、そこがひとつの問題。皆が皆、プ



対談を終えて

口野球選手になれるわけでもないし。取材した皆さんはやつぱりしんどそうだった？

早見 それでも、僕が話を聞いた皆さんは息子が甲子園に行った方が多かったですし、小さい頃からのお茶当番の見返りがあった方が多かったので、そうではない、見返りのなかった大半のお母さん達の気持ちも汲めるような本にしないと、というのは常に頭に置きながら書いていました。

高橋 そんな思考で書いてるのか。ところで、今はそうやって生身の小説家が色々と考えて苦しみながら書いてるけど、AIが小説を書くような世界が来る。AIが作った本と、小説家が書いた作品、どっちが受けるのかな

……。

早見 人工能が書くのが人間が書くのが、読む人が少しでも呼吸をしやすくなる物語が生み出されるなら、僕はそれでいいと思っています。それによつて自分が淘汰されるなら他の仕事をすればいいだけなので。

高橋 とはいえ、淘汰されるわけにはいかないでしょう？

早見 小説家としての自分はおそらく謙虚で、全ての作家に対して「自分には書けないものを書く人」として尊敬しています。でも、人間としての自分はすごく不遜で傲慢です。自分は何をしても食っていきけるという根拠のない確信が昔からありました。大学時代に世界を旅してきた中で、インドのパ

ラナシという街での悲惨だと思つた出来事がありました。沢山の物乞いがいた通りで日本人のおじいちゃんがガツと僕のズボンを押込んで「日本人？」と尋ねてきて、喜捨を求めてきたのです。当然心は掻きむしられはしましたが、一方で「俺、これできちやうな」とも。

最悪、食いつぶぐれそうになったらここに来てこれをやればいいと。そう思つた瞬間に何となく生きることに対する恐怖がなくなりました。あの経験が根底にあるので、変に売れ筋のものを書いて文壇に媚びようという気持ちにはならず済んでいます。自分のやりたいものを貫いて、それで駄目なら仕方がないと思えて。やつぱり傲慢ですかね。

高橋 いや強いね。自分にはできない……かなあ。それで、今後の具体的な構想はあるの？

早見 これは是非由伸さんに聞いてもらいたいのですが、12年ぶりに東京に戻つてきて、ここは人間が住む環境ではないと痛感しています。辛いですよ、東京。皆が生きることに必死すぎる気がします。僕は過去6年単位で移住していますが、今回の東京もやつぱり6年が限界だろうなど。娘が高校を卒業して大学に入ったら、僕はちゃんと海外に住んでみようと思つています。

高橋 海外に住むんだ！もう場所は決めるの？

早見 チリのサンチアゴという街が第1候補ですね。大学時代に浴びるように南米文学に触れていたこともあつ

て、1冊でいいからスペイン語で小説を書いてみたいと。それはもう楽しみとして、それがあからあと4年、東京で頑張れる。少しずつですがスペイン語の勉強も始めています。

高橋 実に計画的！（笑）すごいなあ。

早見 地方への憧れみたいなものはないですか？

高橋 実家が日本昔話に出てきそうな所だったから、あまり憧れはないかなあ。早見のように「最悪これをやればいい」とも割り切れないし、今の生活をしっかりと保つて、次に求められた時の出番に備えたい気持ちもある。冒険するタイプでもないし、自分から動いて場所を変えて、何かに憧れて取りに行くということもあまりないのかな。

早見 でも、送った本は読んでくれませんし、そういう意味では由伸さんは何をやっても面白がりますよね？ とりあえずチリには遊びに来てください。

高橋 チリかー、想像もつかないね。でもそういうのがあつたら行きたくなるし、早見がそこで書く題材が何になるのかも気になるところ。今日は忙しい中、本当にありがとう。

早見 こちらこそありがとうございませした。メシ連れていって下さいね（笑）。